

となり云々、半井ト養下さる、紙はなにえにしもありとおもへば、古へ引出物祿物などいふ、みな贈りものなり、紙をつかはすは目録の心なり、沙石集に、かへり引出物とて、紙に物かきてとらせたることあり、引出物は、馬など、貴人へも獻することあり、祿は上より下へ賜ふものなり、漢土には、褒美にはな遣すを、纏頭、助采といへり、板橋雜記などにみえたり、金瓶梅十一回書袋内取兩封賞賜、每人三錢、これらの外に又一義あり、色道大鑑、花にたつる、下略して、花と計りもいふ、我思ふ女分は差合あるか、又は遣女この男に賣事を承引せざるを、女郎と密談して、各別の女郎をはなし置、心ざす女郎に逢事なり、見せ男の心におなじ、是は外へみする女郎なり、又傾城屋の女子を抱るにも、肝煎の者にまよはされて、花たてらる、といふ名目あり、是はいらざる事にて、常のものゑりても益なし、其外圖取に花あり、又京難波にて買色の揚錢にいひ、又料物を入花など云ふ、いづれも花に出すといふことより出、

〔賤のをだ巻〕翁○森山が大御番勤て在番する比、相番の咄に、三浦某大御番大久保主膳正組若き

比安永より二三年吉原へ行て遊びたりしに、其遊女初會とはいへど、殊の外よくもてなしたり

しに、こらへがたくて、其夜床花を十五兩遣したり、彼女もかたじけなく思ひけるにや、明る朝歸

る時、大門迄送りたり、其後ふた、び三浦行ず、友達の左ばかりよくしたる女を、何故にふた、び

ゆかざると問へば、三浦がいふ、かやうの次第なり、金もらひたりとて、初會より送り出る女

おもしろからずとて、其後尋ねもせずに置たりと云咄しを、相番の咄したり、其比の人の心感す

るに餘りあり、誠の遊びなり、今は始めより遊女の方から、上まへ取て歸るべき工み計にて、其如

き筋の立たる遊人は中々なし、殊に其辨利を發明と思へり、暑○暑なる人情なり

〔嬉遊笑覽九娼妓〕揚錢多く負て返すことのならぬをば、桶ふせといふことすといへり、似せ物語に、

男女のうなづき合て走らむとするを、長聞つけて、男をばつけと、つけまければ、たばかりて、くらにこめて、まばりければと云々、此ころは桶ふせなどは未なかりしにや、寛永十九年、吾孀物語、や